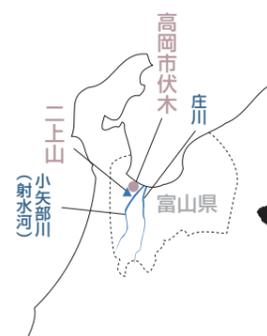


越中万葉

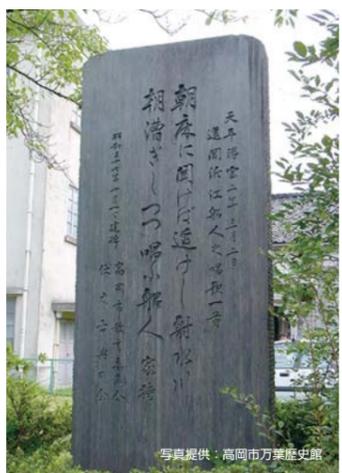


万葉集を編纂した大伴家持は、天平十八年(七四六年)から五年間、越中の国守を務めました。当時の越中は家持が「しなごかる越」と詠んだように、奈良の都から遠く離れた鄙の地。都とは異なる風土の中で家持は多くの歌を詠みました。万葉集に残る家持の歌四七三首のうち、五年間の在任中に詠まれたものは実に二二三首にのびります。



二上山から見る小矢部川

写真提供：幅谷 廣司



伏木気象資料館前庭

朝床に

聞けばはるけし

射水河

朝漕ぎしつ

唱ふ船人

揮毫 中尾 哲雄

朝床に 聞けばはるけし 射水河
朝漕ぎしつ 唱ふ船人

大伴家持(卷十九四一五〇)

〔歌意〕朝の床のなかで耳を澄ますと、遠く遙かに聞こえる。射水河を朝漕ぎながら歌う船人の声が。

《解説》

「はるかに江を渡る船人の唱を聞く」と題するこの歌は、天平勝宝二年(七五〇年)三月三日(太陽暦では四月十七日)の早朝に詠まれました。三月三日は「上巳の節日」で、春の農耕の始まりに際して災厄や不浄を除く儀式を行ったといわれています。家持は、大切な日を迎えるにあたって朝早くに目覚めてしまっただけでしょう。

家持が暮らしていた国守の館は、伏木気象資料館付近にあったと考えられています。ここは海に近い高台で、今も近くを小矢部川(射水河)が流れています。大正時代の初めに分離されるまで、小矢部川には庄川が流れ込んで二つの川となっていました。家持が見た射水河は、現在より遙かに豊かな水量の大河だったことでしょう。滔々と流れる川と遠くから聞こえる船人の歌声：おおらかな春の風景が浮かびます。

家持は「射水河い行き廻れる玉くしげ二上山は春花の咲ける盛り」に：(卷十七三九八五)をはじめ、射水河を何度も歌に詠み込んでいます。